薬　事　日　報　　2024（令和6）年4月3日　水曜日

社会でドラッグロス認識を

患者の思い、写真展で共有

製薬協

日本製薬工業協会は3月25～31日まで、JR大阪駅前の梅田蔦屋書店内で写真展を開催し、様々な立場で病に向き合う患者や医療関係者など、計18人のポートレートやメッセージを展示した。それぞれの思いを一般市民と共有することで、ドラッグラグやロスなど解決すべき社会課題を広く認識してもらいたい考えだ。

「病と生きる。希望と生きる」をテーマにした写真展で、癌患者に加え、企画に協力した日本臨床腫瘍学会など3学会の医師や薬剤師、看護師らの写真や思いを綴ったメッセージを展示した。病に対して希望を失わず前向きに生きる患者の姿や、海外の薬を日本でも使えるように求める医療従事者の声を伝えている。

18人のポートレートとメッセージを展示

製薬協がこうした啓発の写真展を企画するのは初めて。昨年12月に東京で開いた写真展には6日間で約550人が参加するなど好評で、急きょ大阪での開催を決めた。大阪駅近隣の地下通路などに大規模な告知広告を展開し、広告も含めた写真展の様相となった。

初日に現地で行われたトークセッションで、製薬協の上野裕明会長は「希少疾患について医薬品を提供することに挑まねばならない。患者さんの思いや医療従事者の思いを理解してこそ、いい医薬品ができる」と強調した。

上野製薬協会長（左端）や写真家のハービー・山口氏（左から2人目）らが思いを語った

18人の撮影を担当した写真家のハービー・山口氏は、笑顔にこだわって撮影した理由として「幼少期にカリエスを患った。弱い者の気持ちがよく分かる。患者の私は医師の笑顔を望んでいた」と涙ながらに語った。

日本癌治療学会の立場から、高橋剛氏（大阪大学大学院医学系研究科医学科教育センター）は「専門とする希少癌の消化管間質腫瘍（GIST）の治療を行う上で、欧米で認められている薬が日本には入ってきていない」と述べ、理解と解決を呼びかけた。

GIST患者の谷島雄一郎氏（ダカラコソクリエイト発起人・世話人）は「当事者と専門家だけでは課題は解決しにくい。社会の様々な人に関わってもらうことが大事」と、社会全体での問題認識を訴えた。